

雑報

定点観察を取り入れたファミリー自然観察会の試み

野口喜充・大森威宏

群馬県立自然史博物館 〒370-2345 富岡市上黒岩1674-1

キーワード：観察会、定点観察、自然体験

はじめに

群馬県の海拔標高のうち最も低い地点は東部の板倉町で12m、最高地点は日光白根山の2578mであり、同一県内で標高差が2500m以上ある。そのため、同一県内でありながら、低湿地、丘陵帯(~600mであり、低湿地を含む)、山地帯(600m~1600m)、亜高山帯(1600m~2400m)の4つの区分に分けられ、それぞれの垂直分布帯で特徴のある自然が存在している。

自然史博物館では、群馬県内の変化に富んだ自然について県民の理解を助けるため、県内各地を会場にファミリー自然観察会を実施している。地域に特有な自然を現地で観察する内容に加えて、どこにでもある自然を楽しみながら観察会を実施している。従来は年度ごとにいくつかのテーマを設定し、毎回異なった地点での観察会を実施してきた(表1)。

平成12年度から14年度の3年間、一定の区域での季節による自然の変化を観察する定点型観察会を試み、実施した。平成12年度は里山(吉井町牛伏山北麓)を、平成13・14年度は山地草原(赤城山覚満淵周辺・榛名山沼ノ原)を観察地点にした。

定点型観察会をとり入れた理由

従来の観察会は、「県民の群馬県内の自然についての理解を助ける」ことをねらいとし、県内各地で毎回異なった地点で、博物館職員や外部講師による解説を交えながら自然観察を実施した。動植物には観察の適時性があり、観察会のメインとするテーマに最も適した時期に実施してきた。

しかし、植物でたとえると、開花した植物は図鑑等で知っていても、蕾の状態あるいは葉だけの状態は案外知られていない、季節による自然の変化を紹介することができない等の課題が生じた。そこで、観察地点を固定し、季節による変化を観察することにより、同一地点での自然の変

化、生物どうしのかかわり、同一生物の季節による変化等を季節ごとに観察することができ、その地点の自然や生物どうしのつながりを参加者の方により深く理解していただくことができる。以上の観点から、平成12年度から14年度にかけて、定点型観察会を実施した(表2)。

定点型観察会における季節性とテーマ設定

観察地点を固定し、季節による変化を追うことにより、生物の生活史を理解するだけでなく、生物どうしのかかわりを時系列的に把握し、特定の生物種や生物群集のより深い理解につなげることができる。ただし、目をひく生物群が季節によって変化するため、同一地点でも観察会のメインに置くべきテーマが異なり、回ごとに異なる講師を起用する必要が生じることがある。表2に3年間の観察会の中でとりあげたテーマ、主要な観察資源を里山、山地草原の場合にわけて記載する。

観察会を運営する上で参加者の年齢層、興味・関心については十分考慮する必要がある。たとえば、里山でファミリー自然観察会を運営する場合、春にはスミレ類を中心とした花が目につき、夏は甲虫類に関心が集まる。この場合、春の主なターゲットは親の世代で夏の主なターゲットは子の世代となる。しかし、定点で連続的に観察することのメリットを考慮すると、メインと想定される年齢層以外



図1 里山における春のたんぽやあぜ道の植物観察



図2 里山における夏の田んぼや水路の植物・水生昆虫観察



図3 里山における秋の水田雑草観察

の人にも満足が得られる観察資源を用意する必要がある。また、特に里山のような、複数の景観要素が複合する地域の場合、各回においてメインの活動の場を定めながらも、たとえば、特定の田んぼの一角に立ち寄りなど、前回や次回をふまえた解説や観察が必要であると考えられる(図1～3)。

定点観察会を行う場合の季節性に起因する気づいた問題点を里山・山地草原にわけて以下説明する。まず里山の場合、メインテーマの観察ポイント、観察対象が季節によって大幅に異なる点があげられる。これは、里山の中でも雑木林を主体に観察するか、水田周辺を主体に観察するかあらかじめ対象を絞ることで解消できそうである。しかし、里山は狭い範囲に大幅に異なる景観要素が結合することで特徴づけられる。対象を絞るか包括的にとらえるかは観察会主催者の意図に起因する問題なのでこれ以上言及しない。さらに、里山では特定の分類群の生物の動きが少なく、目につきにくい季節が存在する点もあげられる。たとえば、盛夏の雑木林に咲く花は限られたものになるし、秋季の雑木林の昆虫も成虫の状態のものは少ない。これらの「端境期」においても、別の時期のメインテーマとなるべ

き生物をさがし、季節変化を追う手法も一連の観察会の中で採用した。また、夏季の活動時間の制約もあった。標高が低い里山では夏季は30℃をはるかに超える高温下での観察会を余儀なくされ、また、昆虫の活動が早朝に活発になることと相まって、午前中の早い時間の実施が望ましいが、当館のような全県民を対象とした観察会の場合、受付をむやみに早くするわけにいかず、今後の課題が残った。

山地草原の場合、春季、気温や雪解けなどで観察可能な生物が大きくなる可能性があり、また、当日の天候によっては昆虫の動きがまったくないというリスクがある。この場合、植物をメインテーマにすれば不確実性は排除でき、卵やさなぎで越冬する昆虫を観察にとりこむ必要もある。また、芽だしや幼虫・卵の昆虫については夏へつなげた解説を行う必要がある。いずれにせよ、事前に綿密な下見を行う必要があることはいうまでもない。山地において夏季は、開花植物の交代が早く、また、年によってずれることが多い。このため直前の下見が重要であることはいうまでもない。さらに、大規模な山地草原の中には観光地となった場所も多く、これらの場所ではコース設定、時間設定に制約を受けやすい。

成果と運営上の課題

成果

- ・観察コースを統一し、前回や次回の観察会を考慮した観察や解説を取り入れたため、季節による自然の変化を県民に紹介することができた。

- ・核となる講師(館職員)を固定し観察資源により講師を一部変えたため、生物同士のかかわりを時系列的に紹介するとともに、その時期特有の生物にも対応することができた。

- ・直前の下見を実施したことにより、観察地点の観察会当日に近い自然の様子をつかむことができ、事前の最終打ち合わせが効果的に行えた。

運営上の課題

生物同士のつながりを時系列的に観察する際に、本来ならば毎回同じ参加者で実施する方法が効果的であると思う。しかし、テーマに対する参加者の興味関心、なるべく多くの県民に群馬の自然を知り親しんでもらいたいという館の方針、参加希望者を抽選で選ぶ(定員は40名であるが、最大申込者数が定員の4.2倍に達するなど毎回定員を大きく超えた申し込みがあり、県民が平等に参加できるようにという観点から、毎回抽選で参加者を決定している)等の要因から、毎回半分以上の参加者が違うという結果であった。講師も前回や今後の観察会を考慮して解説・観察を行っているが、参加者を固定しての実施も今後の課題としていた。

表1 平成11年度の観察会のテーマ・実施場所一覧表

実施時期	テーマ	実施場所(観察会会場)
5月	低湿地の植物	板倉町谷田川周辺
6月	大峰山の動植物	大峰山周辺
7月	街の中の自然散策	渋川市あじさい公園
11月	地層を観察しよう	下仁田町西牧川周辺
1月	冬の雑木林で植物観察	藤岡市庚申山総合公園
3月	雪の上のアニマルトラッキング	沼田市玉原周辺

表2 里山における観察会テーマ設定と主な自然観察資源(群馬県吉井町)

	メインテーマ	観察資源
春	春の草花	春の草花
	冬眠あけの昆虫	昆虫の越冬と冬眠あけの昆虫 カエルの卵塊とおたまじゃくし 樹木の展葉 田んぼの春
夏	雑木林の昆虫	雑木林の昆虫
	田んぼの夏	田んぼや水路の水生生物 雑木のシュート伸長
秋	木の実・草の実	果実と種子散布, どんぐり
	秋の昆虫	秋の昆虫(主に草地, 水田) 水田雑草と畑地雑草 野鳥

山地草原における観察会テーマ設定と自然観察資源
(群馬県赤城山覚満淵周辺及び榛名山沼ノ原)

	メインテーマ	観察資源
春	春の草花	春の草花
	冬眠あけの昆虫	昆虫の越冬と冬眠あけの昆虫 樹木の展葉
夏	草原の花	草原特有の植物と秋の七草
	草原の昆虫	草原特有の昆虫 訪花昆虫
	草原の夏鳥	草原の鳥